花埋み

渡辺淳一

角川文庫 4074

花埋み（はなうづみ）

渡辺淳一（わたなべじゅんいち）

角川文庫　4074

昭和五十三年七月三十日　初版発行
平成八年五月十日　三十九版発行

発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）三二三八—八四五一
営業部（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——多摩文庫
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

わ 1-10　ISBN4-04-130710-4　C0193

花埋み

渡辺淳一

角川文庫 4074

一

利根川は関東一の大河である。

上信越の山並から流れ下ってきた雪解け水は、この北埼玉俵瀬にきて豊かな水面を見せていた。上流の岩を噛む激しさはもうここにはない。悠々と大河の風格を成して流れる川面に純白の帆を張った大舟がゆっくりと下っていく。目の届くかぎりの水面に帆だけ数えて十四はある。河岸に立ち目を止めると船も水も風景のすべてが柔らかい春の光の中に止っている。「おーや、おーや」と船を漕ぐ船頭の声もこの岸からは聞えない。

川は岸に近く萱場になり、その先は盛土をした堤につながっていた。堤からは街道の松並木まで青く色づいた麦畑が一望の下に見渡せた。

俵瀬村の庄屋、荻野綾三郎の家はこの麦畑のほぼ中程にあった。正面に長屋門を持ち裏に白い蔵をもった豪壮な邸は、欅や棕櫚の樹木に黒々とおおわれて、堤の上から見ると平地の中の城のような構えを見せていた。

この一帯は荻野姓が多い。いずれも総本家は足利氏の流れをくむくるま家で、家紋も足利家と同じ丸に一つ引きである。その中でも綾三郎の家は上の荻野と呼ばれ、下の荻野と並んで最も由緒正しく、農家であるのに古くから苗字帯刀を許されていた。当主の綾三郎は今年五十二歳だが、三年前から頑固な関節痛に悩ませられ、奥の部屋でほとんど寝たきりの生活を送って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いた。長男の保坪は二十四歳で独り身な上に農業にはあまり関心がなかったので、実際に家を取りしきっているのは四十五歳になる老妻のかよであった。

かよは小柄で眼元の涼しい賢妻であった。俵瀬一番屋敷という名に溺れず、堅実に家をとり仕切り、危なげなく荻野の家を守った。一日の仕事が終り風呂へ入る時でも、夫をいれ、保坪をいれ、使用人から下女の果てまでいれてから最後に入った。一家の主婦がすべてを見届けるのが当然の勤めだとかよは考えていた。子供は男の子は保坪と増平の二人だけで、あとの五人は女ばかりだった。五人ともすでに嫁いでいたが、かよの聡明さを受けてか、女の子はいずれも読み書きに優れ賢く美しかった。

「上の荻野を見習え」というのがこの辺りの人の口癖で、村人は荻野の家へ一様に畏敬と親愛の情を抱いていた。

だがこの一点の翳りもないかにみえる上の荻野に、近頃奇妙な噂が流れていた。

一年前、この八里先の川上村の豪農、稲村家の長子、貫一郎へ嫁いだばかりの五女のぎんが嫁ぎ先から戻ってきているというのである。それも軽い里帰りとか、お産のため、というのでもない。ただ一人で風呂敷包み一つ持って帰ってきたというのである。しかもそのまま居続けてすでに半月近くになるという。

このことについて荻野の家の者はもちろん、使用人も何も言わない。だが利根川べりをぎんが実家に向って歩いているのをたしかに見たという者がいる。それも一人でなく三人もいる。

もともと利根の洪水さえなければ十年一日のごとく、何の変りようもない田舎である。東京

でこそ、御維新になり明治新政府ができ、天皇さまが京都から東京へ移られた、と目まぐるしく動いていたが、その余波はこの北埼玉にまではまだ及んでいなかった。

村人は退屈で噂に渇えていた。嫁取りでも葬儀でもいい、ま新しい話題が欲しかった。そんなときに堅実な家風で鳴った荻野の娘の里帰りは、彼等の渇えを癒すに充分な事件であった。

「婚家で何か問題でもあったのかな」

「一向に戻る様子もないそうです」

「五女のぎんさまといえば、美人揃いの荻野様の家でも特別美しくて、賢いお方との評判だったが」

「十歳頃にはすでに『四書五経』から、『小学』まであげられたということです」

「そんなお方が、不思議ですなあ」

「これはまた聞きですが、何か気鬱の病だとか、それで療養にお戻りになったとか」

「しかし川上からは誰方もお見えにならんのでしょう」

「それです、それがおかしいですなあ」

「お姑さんと折合いでも悪かったか、あるいは旦那さまとでも」

「賢いお方ですからそんなこともないと思いますがね、でも川上の稲村様といえば以前は代官見付のお家ですからねえ、せい様とおっしゃるお姑さんも健在でなかなか厳しい家らしいですよ」

「まさか、このまま離縁になど……」

「滅相な、上の荻野ともあろうお家で、しかもお母さんのかよさまがついています、よもやそんな恥さらしなことはさせますまい」

「折角の名に傷がつきますなあ」

明治初年の保守的な農村で、妻が実家に逃げ帰るなどということは考えられない。

人々はあちこちで荻野の家のことを話し始めた。今まで輝くばかりに一点の曇りもなかった名家だけに、この噂は一層興味を煽った。だがかよも保坪もそんな噂をよそに一向に変った様子はなかった。道で人に逢っても、家で出会う商人や小作人にも、いつもの、にこやかな顔で平然と応対した。家の中にもそんな暗い翳はどこにもなかった。

「もう川上へお帰りになったんではありませんか、誰も家にいるのを見た人はいないのですからね」

「いやいや、そんなことはありません、現に川上の婚家にはぎんさまはいらっしゃらないということですからね」

「ではどこか温泉地にでも出かけているのと違いますか」

「いや、たしかに荻野様の家にいるのです、もしお帰りになったら村の誰か一人くらいは見るはずです、奥にきっといるのですよ」

閉ざされた農村だけあって人々の目は鋭い。かよがどう振舞おうと、噂は一向に治まる気配はなかった。それどころかかえって大きくなる。それをかよは知らぬわけはなかった。好奇心と同情の入り交った村人の眼をかよは感じている。中には話のついでに探りを入れる者もいた。

荻野に嫁いで三十年になるが、こんな立場に追い込まれたのは初めてであった。だがかよはなお黙り続けていた。俵瀬の一番屋敷として人々の範となっていた荻野の誇りを、かよはまだ捨て去る気にはなれなかった。

二

「それで、ぎんは今どこにいるのです？」

友子は久しぶりに訪れた挨拶もそこそこにかよに尋ねた。友子はぎんのすぐ上の姉で年齢は四つ違いだった。五年前に熊谷の神官の家に嫁いでいたが、二日前、折入って相談したいというかよからの便りを受けて今朝早く熊谷を発って俵瀬に来たのだった。相談というのはもちろんぎんのことであった。

「奥の縁側ぞいの八畳にいます」

「寝たきりなのですか」

「時々起きてはいるけど、まだ少し熱があるし……」

「お医者様には診て貰ったのですか」

「万年先生にね」

友子はうなずいた。万年翁は友子が嫁ぐ前から俵瀬の実家に出入りしていた漢学者で、友子も兄の保坪に交って読み書きを教わったことがある。江戸の寺門静軒の門下で十年前から俵瀬へ来て娘の荻江とともに村塾を開いていた。当時の漢学者の多くがそうであったように万年翁

も漢方医の心得があって、この辺り一帯の医師も兼ねていた。

「で、何とおっしゃるのです」

「それが……」

かよはうかがうように周りを見廻した。板の間に続く茶の間にはかよと友子の他は誰もいない。それを見定めてからかよが少し顔を近づけて言った。

「膿淋だと」

「のうりん？」

かよは眼でうなずいた。

膿淋とは漢方での言葉で、現在でいう淋疾をさす。高熱とともに激しい局所の痛みと、排尿痛がある。梅毒と並び称される性病であることは言うまでもない。今でこそ淋疾はペニシリン、クロマイといった抗生物質が出来てさして怖い病気でなくなったが、サルファ剤さえなかった当時としては一生治りきれない業病であった。その業病に嫁いで一年にもならぬぎんが罹ったのだと言う。

「すると……向うで」

「……」

「いつからです」

「ぎんの話ではもう半年にもなるというのです」

「じゃ嫁いですぐじゃないの」

友子にしてもまったく思いもかけない話であった。
「それで、治る目処はあるのですか」
「はっきりはおっしゃらぬが、万年先生の御様子ではなかなか難かしいものらしくて」
「膿淋にかかれば子が産めなくなると聞いたけど」
「そのこともあります」
かよは目を伏せた。事実、淋疾にかかった婦人の大半は不妊症になった。それは今もあまり変らない。
友子は一つ大きく息をついた。まったく寝耳に水であった。信じられなかった。だがこうまで言われた以上信じないわけにはいかなかった。
「向うでは何とおっしゃるのです？」
「どういうお心積りなのか、正式には何の連絡もありません。向うを発つ時、療養のためしばらく俵瀬に行ってくると、女中にだけ言ってきたというのです」
「で、ぎんは」
「十二日になるが、一向に帰る気はないらしくて」
「そんなことを言っても……」友子は膝をのり出した。
「じゃ、ぎんの方から勝手に来たと……」
かよはうなずいた。
「そんな我儘を……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

嫁の方から婚家をとび出してくるなどということは友子にはとうてい考えられない。しかも食うに困る水呑百姓ならいざしらず、相手は北埼玉でも指折りの大家である。

「何ということをしてくれたのです」

妹の不行跡はすぐ親戚縁者としての自分にも及んでくる。友子は他人事ではなかった。

「そうとまで知っているのに、何故家においておくのです」

末っ子だけに自由気儘に育てすぎた故だと、友子はかよを責めたい気持もあった。

「意見をして帰したらいいではありませんか」

「それはそうだけど、着いた日からひどい熱がでて、おまけに大変な腹痛です」

ぎんは夫に膿淋をうつされたのだったと、友子は改めて気付いた。

「この二、三日、ようよう熱は落ちついてきたのです」

「それじゃ向うでも」

「冬からはほとんど寝たきりだったらしいのです。少し風邪気味だという便りはあったけれど、その程度のものだろうとあまり心配もしていませんでした。とやかく言っても向うさまにおあげした子ですからね、あまり様子を尋ねるのも悪いと思って」

母の気持も友子には痛いほど分る。

「ぎんも告げるのが恥ずかしくて、必死にこらえていたようです」

「……」

「二月に熱があるのに水を使って、眩暈を起して倒れてからは、もう起きられなかったよう

です」

かよの話を聞いていると無理もないと思う。ぎんが逃げ帰ってきた気持も分る。

「ほんに困りました」

話があった時、いい縁談だとかよはとびついた。それにはぎんの気持はかけらほども入っていない。言われたとおり、つくられたとおりの結婚であった。だがそれで世間は通っていた。

「私が迂闊でした」

かよは軽く目をおさえた。ぎんだけを責めるわけにはいかない。縁を結んだということから言えばぎんより、かよや仲人の方にはるかに責任がある。しかしだからと言って、今の不幸を防ぐことができたろうか。

「不運だったのですよ」

友子が母を慰めるように言った。だが当のぎんにとってみれば不運だけで済ませられるものではなかった。友子はそこに気付いて慌てて声をのんだ。

かよは思い直したように鉄瓶から湯をとって急須に注いだ。この数日、悩み続けた故か、友子の眼には母が急に小さくなったように見えた。

「お父さんは何とおっしゃってるのです」

「すぐ帰せと」

「川上へですか」

一人で戻ってきたまま動こうとしないぎんもぎんだが、性病をうつした夫の許へすぐ帰れと

いう父も父だと友子は思った。だが、といってどうしたらいいものか、このまま残るか、帰るかの二つに一つしかないこともたしかだった。

「お母さんは」

友子には今すぐこれといった名案も浮ばない。

「このままではいろいろと世間様に取り沙汰されるばかりですからね、出来たら早く帰った方がよいと思いますがねえ」

友子はうなずいた。

「けど……」

かよは少し言い淀んでから言った。

「ぎんにはぎんの考えもあるだろうから」

「もう治らないものでしたらね」

「あんたからぎんの本当の気持をよく聞いて貰いたいのだけど」

ぎんは友子の四つ下の妹である。ぎんは末っ子であっただけに姉妹の中では友子が一番親しかった。ぎんが嫁に行く時も友子は前の日から来て一夜語り明かした。その時、ぎんは嫁に行くことに何の疑いも抱いていなかった。新しく開ける生活へ十七歳の娘は娘なりの期待をもっていた。その明るく聡明な妹が一年後にこんな姿で戻ってくるとは、友子自身思ってもいなかった。

「あちらさまへも、そろそろなにかのお便りをせねばなりません」

「そんなお方とも見えませんでしたがねえ」
友子は嫁入りの時に垣間見たぎんの夫となった人の顔を思い浮べた。男には惜しいほどの白く優しい顔であった。それはぎんの小麦色に締った顔と好一対であった。
「殿御は分りませんねえ」
それが今の友子の偽らぬ気持であった。

父の居間と縁続きの奥の八畳間に友子が顔を出した時、ぎんは床に横になったまま本を読んでいた。
「あ、友子姉さん」
襖の開く音で振り返りざま、ぎんは本を枕元において床の上に起き上った。
「いいわ、寝てていいのよ」
友子が言ったが、ぎんは慌てて寝着の前を合わせ坐り直した。
「どうなの」
嫁ぐ時、卵形で張りのあったぎんの顔は、逆三角形に顎が尖り、顔色は膿淋特有の蒼ざめた顔に変っていた。
「どうしてここへ」
「久し振りに弁財まで来る用事があったから、母さまがどうしているかと寄ってみたの、そしたらあんたが来ているというので、吃驚したわ」

出来るだけ平静を装ったが、ぎんは友子の現れ方の普通でないのをいち早く察していた。
「母さまに呼ばれたのね」
「……」
「私のことで相談をうけたのですね」
二度尋ねられて友子はうなずいた。
「ちょっとだけ」
「私に何を言いたいのです」
ぎんはすでに身構えていた。熱で赤くうるんだ顔に勝気な眼が輝いている。こうなってはありのまま言うより仕方がなかった。
「あんたのことは母さまから聞きました」
「……」
「あんまり突然のことなので、吃驚しました」
「怒っているのですね」
「いいえ」
廻り小さくなって、急に三つ四つ老けてみえるぎんが友子には不憫であった。
「ただこのままではどうにもならないことだけははっきりしています。療養なら療養らしく然るべき温泉にでも行くなり、お家で休むなり、なんとかはっきりさせねばなりません」
「それで姉さんはどう考えるのですか」

ぎんが逆に尋ねた。
「どうって……それはあなたのことですから……」
「早く川上に戻れとおっしゃるのでしょう」
ぎんは先々と見抜いていた。
「決してそんなつもりじゃありません。ただあなたの本心を聞きたいと思ったのです」
「言っていいのですか」
「もちろんです。私はあなたの姉ですよ」
「じゃ言います」
ぎんは丸く大きな眼を真直ぐ友子に向けた。
「私はもう川上へは戻りません」
「戻らない？」
「そうです」
「じゃ、あんたは……」
ぎんは一つ大きくうなずいてから言った。
「そのつもりで出てきたのです」
友子はぼんやりとぎんを見ていた。ぎんの顔には少しの翳りもなかった。むしろ重荷を降したような安堵が浮んでいた。妹である筈のぎんが自分とはまるで無縁の女にみえた。
「明日にでも父さまと母さまに言おうと思っていました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton